

## 夜明け前

現在、己が在ることの口惜しさ、苦さ  
この椅子に深く身を沈めていることの嫌悪  
真夏の日が昇るまでのなまぬるい薄闇  
それら、外界へ開かれたわずかな隙間から  
やっとの思いで、私の感覚がわずかに覗けるものに  
僕は激しく疲れを増幅される

生というものの末期  
醗えた化学反応のような体臭に吐き気がする  
枯れ尽きてもかぐわしい  
そのような香草ではいられぬものか  
動物という何とも淫らな生物なんかではなく

じりじりと暑熱の気配が近付いてくる

それとも、生というものに無感覚な  
それでいて、生のもたらす美のみを吸い込む  
そのような五感のみを残して滅び、朽ち果てたい  
おお、破壊の王となりうる灼熱の太陽よ  
僕を焼き尽くせ

血生臭い、むせかえるような生などもう要らない  
欲望に煽られ、そしてその器を満たすだけの生など  
ああ、夏の太陽よ、お前にくれてやる

(2005.7.18)